

この間からタバコについていろいろなことを考えていた。契機は定期のドック入りで、喫煙の痕跡があつて肺気腫のおそれがあると言われたことである。

昔は、旧制高校に入学すると酒タバコは許されると思われていた。もつとも、一浪、二浪がザラにいたので、満二十歳を超えて入学という人も少なくなかつた。

私も早速酒タバコを始めた一人であつた。よく、美味しくはないが、恰好をつけるためにタバコを始めたという人のことを聞いたが、私はタバコでむせるといふこともなく、最初から、おいしいと思う方だつた。

両切りのピースの缶を切つて香りをかぐ。空いた缶を壁に並べていく。寮の自習室から紫煙の消えることはなかつた。大学を出て入つた軍隊でも、ちよつと休憩と言えばタバコであつた。安いからタバコを吸つていた。

三年間のソ連抑留期間も将校は一日十五本の配給があつた。マホルカというタバコの粉を新聞紙の切れ端で巻いて吸うこともあつたし、お茶の出し殻を干してタバコの代用としたこともあつた。煙が出れば何でもよかつた。

復員、大蔵省に復職後は、主計局での予算査定の仕事に打ち込んでいたし、タバコを手放したことはなかつた。

予算の最終段階では固形物が喉を通らなくて、酒五、六合、牛乳五、六本、卵五、六個が毎日の食料で、タバコはあらかた百二、三十本は吸つていた。

十日に及ぶ最後の折衝を終え、徹夜作業もなくなると、さあ飲もうといふことになる。ある晩酔つてタクシーで帰宅する途中、急に苦しくなつた。今でいう心房細動である。車から転がり出て、救急車を呼び病院に直行した。不思議なもので先生の顔を見たら、ピタリと脈拍も正常になつた。先生がいろいろ尋ねる。ともあれ、酒とたばこを減らすことですなと言ふので、私は「それは何へんもやつてみたけれど駄目だったので、どうせならどつちかをやめます。酒は百薬の長というが、タバコは百害あつて一利なし、思い切つて煙草を止めましょう」と口走つた。

私も男だ、と思つて、それからピタツとタバコをやめて、今日に至つていふ。

米国は禁酒法を実施して、結局失敗している。こういうものは法令で縛るよりも、自然と実現されるように仕向ける方がよい。それは思い切つた値上げである。値上げ大賛成。思い切つて高くし、どうしても吸いたい人には吸わせたい。財政収入はかつてのニューヨーク市の値上げ一挙に十倍という例を見ても、当面増収となる。

日本も思い切つて十倍に値上げしたい。タバコ耕作、製造、販売も全部民間に委託する代わりに、目の覚めるように高い税金を課するのである。

この機会にぜひタバコの制度について根本的な検討をお願いしたい。余つたタバコは外国へ売つたらいい。勝手なことを考えるとやれやれだが、外国人の健康まで心配すること

はない。その国の国民が考えればいいことではないか。